
Music like a Boy

ふゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u s i c l i k e a B o y

【Nコード】

N 2 7 7 6 U

【作者名】

ふゆ

【あらすじ】

母は私にピアノを教えてくれた。けれどそれ以外のなにも教えてはくれなかった。

母に認めてもらうことのできない私は出来損ないだ。

母によって女性性を否定され続けた沓迦くつがはジャズバーで働き始める。

様々な人と出会い、自分を再構築する沓迦の物語です。

Prologue (前書き)

恋愛物語ではありませんが、要素としては薄いものです。またハッピーエンドを目指しておりますが、全般としてシリアスな傾向にあります。こういった傾向がお好みでないかたの閲覧はご遠慮下さい。

物語に出てくる個人名、団体名はすべて架空のものです。

Prologue

私にはなにが残っているのだろう。

疲れた。

頭が重い。

腕が重い。

脚が重い。

重い脚を引きずりながら私は歩いた。

その日は雨だった。暗い斎場のなかで参列者は私ひとりだった。左手首には白い包帯が巻かれている。左手首を骨折した。全身麻酔の手術を受け、リハビリに最低3ヶ月を要するこの怪我。その間私の手首は動かない。

お母さん。あなたに罵られたこの手で、小さくなったあなたを抱えています。ごめんなさい。ごめんなさい。出来損ないでごめんなさい。あなたの希望をひとつも叶えることができなかった。

あなたに応えることのできなかった私はどこにいったらいいのだろう。

小さな箱に収められた母の遺骨を抱えて私は斎場をあとにする。

自宅のピアノを弾くことはこの手ではできない。

母の死を母に教えてもらった音楽で弔うこともできなかった。

それすらできない私はやはり出来損ないだった。

辿り着いた店の名はBar Kontrabass。

私の担当医から聞いていた店だ。看板には「ジャズの生演奏でお寛ぎください」と書いてある。漏れ聞こえる曲は“Someday My Prince Will Come”(いつか王子さまが)。少女であることが許されなかった私がどうしても弾くことのできなかった曲。

それまで枯れていた涙が溢れ、そこから立ち去ることができなかった。

出会い

カタリと扉を開ける音がした。

ジャズバー「コントラバス」のマスター^{うみはらせいら}海原世羅は反射的に「いらつしやいませ」と声を上げ、入口を見る。全身を黒に包まれた少年だった。

「お客様、私どもの店では未成年の方のご利用は遠慮いただいております」

ここは酒を饗する店である。主の世羅は資格のない客を入店させる訳にはいかなかった。

「私は24歳で、すでに成年です」

聞こえてきた声は24歳の青年のそれとは思えぬほど、幼く、しかし乍らハスキーで甘く響いた。

「大変失礼いたしました」

世羅は静かに謝罪した。女性だろうか。彼の人の声を聴いた世羅は思う。カウンターから出て入口へ向かう。客はポケットから財布を取り出し、目の前に来た世羅に小さなカードを見せた。免許証には客が女性であり、申告したとおりの年齢であることが記載されていた。

「わざわざ有り難うございました」

世羅は免許証を返し、客をカウンターに案内する。

「ご注文は？」

世羅の問い掛けに、お任せで、と答えが返ってくる。

スツールに腰掛けた客は世羅と目を合わせることなく、後方に拡がる店内を振り返った。開店時刻を過ぎたばかりでまだ客はいなかった。

比較的アルコール度数を抑えてオリジナルカクテルを作る。お待たせしました、と言い乍らグラスを置いて、世羅は客が身じろぎもせ

ずになにかを見つめていることに気づいた。ほっそりとした後ろ姿は黒のタートルネックに包まれており、形の良い小さな頭の両脇には耳殻が見えている。髪は黒く、頭を覆っている程度の長さしかなかった。

「気になることがありますか」

世羅が声を掛けると、身体ごとゆっくりと前を向いた。

「ピアノがあるんですね」

うつろな瞳で客が言う。その言葉に苦笑した。ここはジャズバーだ。

「私どもは生演奏を聴かせるジャズバーですから」

世羅の返事に、客は弾かれたように顔を上げた。

「私は伊織沓迦いおりとついかと申します。ピアノを弾かせて貰えませんか」

一瞬の躊躇いのあと、客は世羅を見つめて言った。

「はい？」

世羅は戸惑った。この手の売り込みは多い。眉間にしわが寄るのが分かった。その様子を目にした沓迦は慌てて付け加える。

「あの……。標野先生しめののからこちらのお店を伺って来たんです。標野しめのの守人先生もりとです」

標野守人は大学病院で整形外科医をしている。勿論彼のことは知っていた。

「君は。伊織さんだっけ。守人がウチを紹介したの？君に？」

事情が飲み込めずに世羅は重ねて訊ねた。

「紹介された、というか。標野先生から生演奏を売りにしている良いジャズバーがある。行ってみるといい、と言われて」

だんだん声が小さくなる。

「とにかく聴いてみていただけませんか」

沓迦は立ち上がり、ピアノの前に座った。世羅が止める暇はなかった。呆然とした。まあいい。守人が話をしたくらいだから、きっと面白いヤツなのだろう。

世羅がそんなことを思っている間に鍵盤をひと撫でした沓迦は演奏を始めた。

『煙が目にしみる』

この曲は様々なアレンジがあるが、世羅はヴァイオリンの演奏が好きだった。リスペクトするフランス人ジャズヴァイオリニストはすでに鬼籍の人である。ピアノとヴァイオリンの音色が頭のなかでシンクロしている。沓迦の奏でる音は確かだが、泣き出しそうに響いていた。守人がこの店の話をした理由が察せられた。

演奏を終えた沓迦は世羅を見つめていた。

「分かった。毎週火、木、土の夜１１時から来られる？ 閉店時間の朝５時まで。それから今度来るとき履歴書持ってきて」

沓迦は大きく頷いた。

「有り難うございます。必ず来ます」

沓迦の声は、今まで一番大きかった。

出会い（後書き）

一人でも多くの皆さまにお読みいただけましたら幸いです。

Bar Kontrabass の日常

Bar Kontrabass^{コントラバス}。生演奏のジャズバーである。開店は夜6時。オーナー兼マスターの海原世羅は38歳。イギリス人クオーターの彼は、天然の茶色の髪とかなり明るい茶の瞳を持つ。この店を始めて8年経った。今では固定客もかなりいる。

彼は毎日午後4時には出勤する。仕込みと新しいカクテルの研究のためだった。彼の熱心な研究の成果はオリジナルメニューと売り上げの増加に大きく貢献していた。生演奏の開始は7時なので、それまではレコードを掛けている。このレコードは彼が大学時代からせっせと収集したものだった。

海原世羅は大学時代、ジャズ研究会を立ち上げた。ジャズ理論の研究と実際の演奏活動を行っていた。担当はダブルベース。クラシックではコントラバスと呼ばれている。彼のイギリス人の祖父が趣味でコントラバスを演奏していた。それが店の名の由来である。自らも祖父からコントラバスの手ほどきを受け、音楽へ傾倒した。大学を卒業後音楽関係の会社へ勤務し、10年足らずでこの店を開くことができた。社交性を活かし、人脈を広げた結果が今に至っている。

伊織沓迦はこの店に勤務するようになって、毎日開店前の店に顔を出していた。楽譜を確認し、酒の知識を増やすためだ。勤務開始当初からこの店に日参していた訳ではない。最初の1週間で、柔軟性のなさを思い知ったのだ。今までどっぷりと音楽だけの自分の世界に浸かっていたしつぺ返しを喰らった。コンサートではないのだから、自分の組み立てたプログラムだけで聴衆が満足するはずがなかった。リクエストに臨機応変に対応する、ときには酔客の機嫌を取ることも接客業においては当然必要なことだった。それができなかった沓迦はスタッフからも世羅からも何度か助けられた。トラブル

の度に沓迦は自分の無力さを実感した。世羅に相談し、勉強のため日参することを許された。ピアノを弾かない日は下働きのアルバイトとして雑務をこなした。沓迦を見ていた世羅にとってもまた、客あしらいが下手な現状が続くならば、馘首もやむを得ないと考えていただけにこの申し出は納得した。

世羅は店のこと、客のこと、ジャズのことを沓迦と話し合った。またこの時間を通して沓迦の人となりを経験することが知ることとなった。

「沓迦ちゃんって変わった名前だね」

ステアしながら、世羅はカウンターで楽譜を広げている沓迦に話し掛ける。開店前の時間である。沓迦は楽譜から顔を上げ、世羅を見つめた。

「履歴書の名前、最初は読めなかったよ」

世羅は続けた。

「母が名付けました。父は私が生まれる前に事故で亡くなっていたので、母子家庭でした。『沓』は重なり合うさま、『迦』はいきあう、出逢うという意味だそうです。父も母も音楽をやっていたので、たくさん音楽と出会い、音を重ねていくように、と思ったそうです。母は音楽バカだったと思います」

カウンターの上で沓迦の左手が拳を作った。ハスキーな声が震えていたように思ったのは気のせいかな。

「マスターも変わった名前だと思います」

沓迦の声の調子が変わった。話題を変えたと分かった。

「オレはクォーターだから、ジイさんの国の言葉でも発音しやすい名前について考えたみたいだよ。Sarahって『小公女セーラ』の名前だっけ知ったときには、かなりショックだったけどね」

沓迦が忍び笑いをする。

「まあ、小学生のときのことだからね。サラ・ヴォーンと同じ名前だからいいかと納得できたのは高校だったよ」

「サラ・ヴォーンがジャズを知る切欠だったんですか」

沓迦の手元の楽譜はサラ・ヴォーンも歌った“Hey Jude”だった。

「いや。“星に願いを”がオレのファーストコンタクト。ジイさんがコントラバスで弾いてた」

「随分かわいらしいんですね」

「小学校の卒業前に、ジイさんがオレにコントラバスを教え込んだのが切欠だろうね。で、練習曲が“星に願いを”だった」

「素敵なおじいさまですね」

「沓迦ちゃんにピアノを教えたのはお母さん？」

沓迦が答えを躊躇う。

「……ええ」

すぐに話題はカクテルの作り方に移った。沓迦が母親との間に問題を抱えている様子は明らかだった。その日の沓迦のピアノは一番冴えなかった。

B a r K o n t r a b a s s の日常（後書き）

次回更新は未定です。なるべく早く更新したいと考えていますが、平均すると月2回程度になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776u/>

Music like a Boy

2011年11月16日14時04分発行